# 津軽方言の感謝表現メヤグ（迷惑）をめぐって


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者: 明治大学教養論集刊行会<br>公開日: 2022-05-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 田島, 優<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/22524 |

明治大学教養論集　通巻561号
(2022・3) pp. 51-76

# 津軽方言の感謝表現メヤグ（迷惑）をめぐって

田　島　　優

## はじめに

津軽方言においてメヤグ（迷惑）が感謝表現として使用されていること[注1]は、前任校（宮城学院女子大学）において青森県出身の学生のレポートなどによって知っていた。一度詳しく調査を行いたいと思っていながら、東京に出てきてしまった。

昨年（2020）度から国立国語研究所の共同利用型研究において、国語研究所が保管している、文化庁の事業として昭和52（1977）年度から昭和60（1985）年度にかけて実施された「各地方言収集緊急調査」の文字化資料について、調査研究を行っている。「各地方言収集緊急調査」は、各県において県内でことばの違いが認められる4、5地点を調査地点として、その地点において3年間にわたってことばの年代差や男女差などを確認するために様々な談話を録音するものであった。そして、その録音テープと文字化資料は各県の教育委員会から文化庁に提出された。筆者も愛知県西春日井郡師勝町（現在は北名古屋市）の録音の現場に立ち会い、文字化の補助作業に携わった。

この「各地方言収集緊急調査」の資料の一部は、『全国方言談話データベース　日本のふるさとことば集成』全20巻（2001～08　国書刊行会）として刊行されている。ただし、このシリーズに収められているのは各県1地点の1談話資料だけである。この事業に関係した者としては、特に場面設定の資料が活用されていないことを非常に残念に思っていた。

現在科学研究費によって感謝表現の発想法の歴史と各地の方言に見られる感謝表現との関係について研究を行っており、その研究資料としてこの「各地方言収集緊急調査」による文字化資料の利用を思いついた。筆者の関心のある感謝表現は、３年目に実施された場面設定において出現する機会が多く、全国の調査資料から３年目の資料がある地点[注2]について国語研究所において閲覧作業を行っている。

青森県の文字化資料を見ていた時に、弘前市の資料があり、そこにはメヤグが用いられており、メヤグについて多くの用例を見ることができた[注3]。そこで、その資料をもとに、弘前市において津軽方言の話者と一緒にそれらの用例についての確認作業[注4]を行った。本稿は、その確認作業によって得られた津軽方言のメヤグの意味用法についての調査結果、並びに津軽方言の感謝表現について報告するものである。

## 1　津軽方言のメヤグについての言及

弘前市立郷土文学館で配布されている「津軽弁講座」の資料[注5]では、メヤグの共通語は「迷惑」となっている。また、第３節で扱う「各地方言収集緊急調査」の弘前市の文字化資料でも「メヤグ」の共通語訳はすべて「迷惑」である。このように、地元の人は「メヤグ」については共通語の「迷惑」と同じ意味用法と考えているようである。例えば、津軽方言の研究者である鳴海助一氏の『津軽のことば』（第10巻　1961　津軽ことば刊行会）においても、

> **めやぐ**　名詞。　めやぐ[注6]。「ぐ」は普通濁音。
> 「迷惑・めいわく」の訛り。「ご」をつければ、さすがに「ごめいわぐ」というが、古老などは、どうしても、「ごめーやぐ」とヤラカシたがる。
> ※**めやぐ**ダバテ、オマェダジノ、カグジコ、カシテケヘデァ。

○ご迷惑だけれども、あんたたちのウラ（裏・お便所のこと）を貸して下さいねェ。

右は庭先きで、家の中へ向かって声をかける場合。(p99)

とあり、ここには依頼要求する場合だけが上がっている。

しかし、東京（東京都本郷区千駄木町、現在の文京区千駄木）出身で弘前大学に勤務していた此島正年氏は津軽方言のメヤグに違和感があったようである。此島氏は、『青森県の方言　新版』(1978　津軽書房）の「Ⅲ　共通語と比べて意義に差のある語」において、メヤグについても取り挙げ、次のように言及している。

メワクシル・メヤクシル（迷惑する）はメワクダ・メヤクダと形容動詞的にも用いられるが、この語などはかなり誤解を起すおそれがありうる。共通語のばあいは、他人の心ない行為のために迷惑する意で、他に対する非難の意が強いが、方言の用法は感謝・謝罪の気持で使われるのである。人から厚意のある贈り物をもらって、「アー、メワクシタナ」あるいは「アー、メワクダナ」と言うのは、あまりの御厚意に迷惑する（どうしてよいかわからない）という気持であり、謝罪のばあいにもあまりに申しわけなくてどうしてよいか迷惑する意なのである。ところが、これが、東京人などには誤解を与えて、「何だ、せっかくのこちらの厚意に対して迷惑とは」と不快にさせるという話は十分にありうることである。語の成立から言えば、方言の用法のほうがむしろこの語の本来のものであって、こちらの謝意の迷惑が相手の負担の意に転じて「迷惑をかける」となり、かけられたほうは「迷惑する」というような新しい用法を生じたのであろう。方言でも「メワクシタナ・メワクダナ」が少していねいになると、「ゴメワクシタナ・ゴメワクダナ」となり、さらに共通語的に「ゴメワクシマシタ・ゴメワクデ

シタ」とも言われるが、ゴメワクになるとこちらの気持から相手かたの立場に一歩ふみこんでいるのではなかろうか。(pp.102~103)

此島氏はメヤグに感謝と謝罪の用法があり、ともに困惑に基づいていると解釈している。今回の調査で、メヤグに感謝と謝罪の両用法があることは確認できた。ただし、メヤグの意味用法をすべて困惑で解釈できるか疑問な点も出て来た。

なお、メヤグ（メーワク）が感謝の用法を持つのは津軽方言だけではない。広戸惇・矢富熊一郎編『島根県方言辞典』(1963　島根県方言研究会）によると、島根県においてもメーワクが感謝の意味用法を持っているようである。

**めーわくする**⓪「サ変」(迷惑する)。有難い。「きんにょはお土産を頂戴しましてメーワクしました」出、飯・簸・出・大・仁・能。隠、全部。

同じような意味用法が津軽方言以外にも見られて大変興味深い。島根県におけるこのメーワクスルがこれから扱っていく津軽方言のメヤグの意味用法と共通しているのかどうかについては、今後の課題としたい。

## 2　津軽方言のメヤグの意味用法

共通語における「迷惑」の意味は、例えば『新選国語辞典』(第九版 2011　小学館）には「わずらわしくていやな思いにあうこと」とある。また堀口和吉（1996）を参考にして少し詳しく説明すれば、「ある事態に遭遇した当人が、それから不利益や負担を蒙って不快に思うことを述べ」ることである。

まず、感謝表現と謝罪表現で使用されている点で、津軽方言のメヤグは共通語の意味用法とは大きく異なっているといえよう。また不快感に関しても、共通語ではこちら側が不快感を被るのに対して、津軽方言のメヤグの場合は不快感を相手に与えており、不快感の方向が全く逆である。

次節（第３節）で弘前市の談話資料におけるメヤグの用例の分析を行うが、その前に津軽方言のメヤグの意味用法についてその分析結果を先に提示しておく。

・津軽方言のメヤグには感謝と謝罪の用法がある。
・感謝は自分（話し手）が相手（聞き手）から厚意を受けた場合に用いられる。
・謝罪は自分の行ったことが相手に不快な気分を与えていると感じた場合に用いられる。
・謝罪のメヤグは依頼要求表現としても用いられている。

これらは、感謝や謝罪、また依頼要求における一般的な用法である。ただし、メヤグの感謝や謝罪の用法は次のような点で共通語と異なっている。

・感謝の用法は、厚意を受けた（受けている）自分の感情の表明であり、そこには相手への気遣いは見られない。（ただし、若い世代では気遣いの意識が見られる。これについては後で述べる）
・謝罪の用法は、相手に不快な気分を起こさせたという話し手の感情の表明である。
・感謝・謝罪の両用法ともに、聞き手をあまり意識しない話し手自身の率直な感情の表明である。

そして、品詞による意味用法の違いは次のようである。

・形容動詞形で出現するのは、その場のとっさの感情の表明である。
・動詞形で出現するのは、その感情の確認を表明するものである。すなわち、その感情を引き起こした事態は以前に行われていたことである。したがって、動詞の場合にはタ形が一般的なようである。『島根県方言辞典』

の例もタ形であったし、注1に挙げた『都道府県別　全国方言辞典』の弘前の感謝表現もタ形になっている。

・相手から不快な行為を受けた場合には、メヤグではなくアリガダメヤグ（有難迷惑）が用いられる。

・メヤグカケルは話し手によって相手に不快感を起こさせた（起こさせる）行為自体に言及するものであり、この場合は謝罪表現ではない。また現代の感謝表現に見られるような、こちらのために相手に負担をかけさせたという使用法もない。

これらの調査結果は、次節（第3節）で扱う用例について、方言話者と話し合ったことを参考にし検討・分析したことによって得られたものである。この結論についての責任はすべて筆者にある。

## 3　用例の分析

まずこの文字化資料について説明していく。青森県における「各地方言収集緊急調査」の事業は昭和53（1978）年度からの3年間であった。場面設定の談話は3年目の昭和55（1980）年度に行われた。見送りや迎えなど次の21の場面が設定されている。

①見送り　②迎え　③訪問　④辞去　⑤道での挨拶　⑥祝儀　⑦不祝儀　⑧出産祝　⑨病気見舞　⑩物を借りる　⑪依頼　⑫無心　⑬指示・助言　⑭道案内　⑮陳情　⑯談判　⑰勧誘　⑱願望・許可　⑲おわび　⑳買物　㉑うわさ話

全国の調査資料を見ていくと、この中で感謝表現が出てきやすいものは④・⑤・⑥・⑧・⑨・⑭・⑳である。⑥祝儀と⑧出産祝はお祝いの品を貰っ

た時の感謝である。④辞去は夕食を御馳走になったお礼であり、⑨病気見舞は見舞いにわざわざ来てくれたことに対する感謝である。そして、⑭道案内は道で出会った人に訪問先の道順を教えてもらったお礼であり、⑳買物は商品（この場合は運動靴）を購入してくれた店側から客へのお礼であったり、まけてもらった客側のお礼であったりする。なお、⑤道での挨拶では、相手から家族の健康を尋ねられた場合や、別れ際に行われる「今度遊びに来て下さい」という挨拶に対して、お礼の表現が用いられている。

弘前市の資料では、感謝の用法のメヤグは④辞去と⑥祝儀の項に出現している。一方、謝罪の用法のメヤグは⑫無心と⑲おわびに使用されている。

＜感謝表現＞

まず⑥の祝儀の項を扱う。ここには、ゴメーヤグという語形によって相手に負担をかけるという用法も見られる。

A　コリャー　ホンノ　ウー　　スルスコダケンドモ　オサメデ　ケヘジャー
（これは　ほんの　えーと　しるしだけれども　おさめて　下さいよ）
B　ウー　ヤ　　スンペーステ　モラテ　ホントン　<u>メヤグダジャー(1)</u>
（ああ　やあ　心配して　　もらって　本当に　　迷惑だよ。
オクサ　　エッテ　サットスタ　モンダケンドモ　エッペァ
奥(の部屋)へ　行って、ちょっとした　もんだけれども　いっぱい
ノンデー　ユッタドステ　ケラエネガナー
飲んで　　ゆったりとしてくれないかなあ）
A　エヤー　<u>ゴメーヤグデスデァ(2)</u>　ヘバ　　ズギナグ　アノー
（やあ　　御迷惑ですね。　　じゃ　　辞儀なく　あのう
ゴッツォニ　ナリスジャ
ご馳走に　　なりますよ）

B　ウー　ナンモ　ネーケドモ　ホントネ　エー　メーヤグダナー(3)
（えーと　何も　ないけれども　ほんとうに　えーと　迷惑だなあ。
マー　ユッタドステ　ケロジャー
まあ　ゆったりとして　くれよ）

この談話には３箇所メヤグが出てくる。いずれも形容動詞としての用法である。このうち、(1) と (3) は感謝表現である。(2) は相手に負担をかけるという意味で使用されており、謝罪表現とまではいえないであろう。(1) は、息子の結婚に対してお祝いをもらったことへのお礼の表現である。(3) は、わかりにくいが、(1) の「ホントン　メヤグダジャー」と同じく「ホントネ　エー　メーヤグダナー」とあり、お祝いをもらったことについて再度お礼を述べているのである。(1) では突然なことであったため、あまり聞き手を意識していない断言の表現である「ジャー」が使用されているのに対して、(3) では落ちついて詠嘆的な念押しの「ナー[注7]」が用いられている。

(2) は、丁寧の意を表す接頭辞ゴ（御）が付いている。いわば、共通語的であり、相手に面倒をかけることを表現している。共通語では、「ゴメーワクデス（ネ）」でも使用するが、「ゴメーワクオ　オカケシマス」のように動詞「カケル」を伴うのが普通であろう[注8]。

方言話者に、感謝表現の場合に相手への気遣いの意識があるのかどうかを尋ねたところ、相手への気遣いはなく、単なる飾らぬ感謝だということであった。

次は④辞去の項である。ここでは動詞形になっている。

A　ズンブ　ナガエスタジャ　ウー　ウッテ　ゴッツォーニ　ナッタスー
（ずいぶん　長居したよ。　うんと　ご馳走に　なったし
メーヤグスタジャ(4)　ワー　コンダ　エグジャー
迷惑したよ。　吾（は）　こんど（自宅へ）　行くよ）

ここは御馳走になって家に帰る場面である。(4) は「メーヤグスタジャ」とある。接待してもらったことに対するお礼の表明である。動詞形になっているのは、その感謝の思いの確認を表していると思われる。ここでも断言を表す「ジャ」が使用されている。

＜謝罪表現＞

まず⑫の無心の項から扱う。ここには依頼要求の表現としてもメヤグが使用されている。

A　ナントガ　メーヤグダケンドモ(5)　ゴマンエン　ナントガー　カステ
(何とか　迷惑だけれども　五万円(を)　何とか　貸して
ケラエネナー
くれないかなあ)

B　ウーン　ンダナー　ニャ　ワーモセァ　ニャー　マンゴセァ　ヨメ
(うーん　そうだなあ。いや　吾もよ　やあ　孫(が)よ　嫁(を)
モラウハンデ　ニャ　ナント　コネンダガラ　タンダデ　ネンデ
もらうから　やあ　なんと　この間から　ただ(ごと)で　なくて、
ワモ　ジェンコ　エルスナー
吾も　銭(が)　要るしなあ)

A　ンー　ヤ　トーガグレァ　タデバヨー　マドマッタ　カネ　ハエル
(はあ　やあ　十日ぐらい　経つとよう　まとまった　金(が)　入る
ドゴ　アルンダエナー　ナントカ　ソレマンデノ　アエダヨ
所(が)　あるんだよなあ。何とか　それまでの　間よ、
ヤー　ヘトツー　タノムデァ
やあ　ひとつ　頼むよ)

B　ヤー　ソエサセァ　メーヤグダナー(6)　エーデヨー　コネァンダ
(やあ　それによ　迷惑だなあ、　(我が)家でよ　この間

ナオスタ　ヤネノ　ジェンコモ　マンダ　ハラッテ　ネー　ワゲセァ。
直した　屋根の　銭も　まだ　払って　ない　わけよ。
ニャ　ワノ　ミニモ　ナッテケ　ケナガステー
やあ　吾の　身にも　なって　くれよ）

(5) は依頼要求の表現である。依頼要求の表現には、例えばスミマセンガとかモーシワケナイケレドモ、ワルイケドのように、謝罪を表す語が用いられる。共通語でもし「迷惑」を用いるなら、ゴメーワクダケドモあるいは（ゴ）メーワク（オ）カケルケレドモといった表現が用いられる場面である。このような依頼要求の表現としてのメヤグの使用は、他に⑪依頼の項で、はしごを借りる際にも「メーヤグダケンドモ　ハスゴコ　カステ　ケラエネベガー（迷惑だけれども、梯子（を）貸してくれないだろうか）」のように用いられている。津軽方言では、逆接の接続助詞としては、先に挙げた『津軽のことば』のメヤグの項の例文にあるように、バテ（バッテ）が用いられるのが普通である。

(6) の「メーヤグダナー」は、相手にお金を貸せないことの思いを表明しているのである。方言話者に、この場合は「困った」（困惑）という意味なのかと尋ねたところ、メヤグにはそのような意味はなく、ここは謝罪の意だとの回答であった。相手に不快な気分を与えたと感じているのである。

次は、⑲おわびの項である。メーヤグの繰り返しと、動詞形が出現している。

A　ソレー　オエノ　アネァ　ドー　テコ　カラマッタモンダガサ
（それ　俺家の　嫁は　どう　手(が)　からまったものか
ツルット　スンベッテ　オドスタッツアネー、　ワレデ
つるっと　すべって　落としたというんですよ、　割れて

スマッタツアネ　　ソレー　ワー　　ソーレデ　エマ
しまったというんですよ、それ。　吾（は）　それで　　今
オメンダッサ　キタンデスネー　メーヤグデ　メーヤグデー（7）　ンニャ
お前の家へ　来たんですよ。　迷惑で、　　迷惑で、　　やあ
ホントニ　　アナ　　アレバ　ハリテァ　カマリステ　キタンデステセァ
ほんとうに　穴（が）　あれば　入りたい　気分がして　来たんですよ）
（中略）
ドーステ　コレ　　カワリコ　カエスタラ　エガベナードモテ
（どうして　これ（の）代り（を）　返したら　　いいだろうなあと思って
クーネ　ナッテ　クーネ　ナッテ　ンニャ　ホントニ　　ツラノガワ
心配に　なって　心配に　なって　やあ　　ほんとうに　面の皮（を）
アズグ　ステ　エマー　アンダ　　ドゴサ　キタンデステセァー
厚く　　して　今　　あなたの　所へ　　来たんですよ
メーヤグステ　スマターネスー（8）
迷惑して　　しまったねえ）

（7）は「メーヤグデ　メーヤグデー」と繰り返されている。このような繰り返しは、謝罪の表現に見られる特徴とのことであった。ただし、学生の報告（後述）によると感謝表現でも使用するようである。これは最近の傾向であろうか。ここでは借りていた皿を割ったことに対するおわびではあるが、同じ語の繰り返しであり、また終助詞が使用されていないことから、あまり思いのこもっていない挨拶的な表現だといえよう。（8）は動詞形であり、かつ完了形になっている。この用例は借りていた皿を割ってしまったことに対する話し手による反省と謝罪の意を表していて、「メーヤグステ　スマタ」のは、相手方ではなく、あくまでも話し手自身である。ここでは語尾に「ネス」とあり、丁寧な詠嘆的な念押しあるいは同意希求という聞き手への働きかけが見られる。

次は⑯談判の項であるが、共通語と同じく「カケル（カケタ）」が用いられている。ここには「アリガダメヤグ」も使用されている。

A　オンメダノ　イヌゴト　ツナエデ　オガネバ　マエネナー
（お前の家の　犬を　つないで　おかないと　だめだなあ）
B　ウー　ソー　オーキーイ　エヌデ　ネス　オエノ　イヌダケァ
（　そう　大きい　犬で　ないし、俺家の　犬は
ストサ　メーヤグ　カゲルヨンタ(9)　イヌデ　ネーイァー
人に　迷惑(を)　かけるような　犬で　ないぜ）
A　ニャ　オエノ　ニワサ　エツモ　クソ　サエルスセァ　ステ
（いや　俺家の　庭に　いつも　糞(を)　されるしよ、　そして
マンダ　ソレ　アリガダメヤグデ(10)　エルノサ　サキタ
また　それが　有難迷惑で　いるのに　さっき
エノ　マンゴ　ボラエデヨー　オッケテ　ナンズギガラ
(吾)家の　孫(が)　追われてよう、　転んで　額から
ツー　ナガシテ　キタデバナー
血(を)　流して　きたではないか）

(9) は「メーヤグ　カゲル」とあり、共通語の「メーワク　カケル」と同じような表現である。日本放送協会編『全国方言資料』(1966～67　日本放送出版会）では、東北地方において、祝儀の項に「メーワク　カケタ」の使用がよく見られる。青森県南津軽郡黒石町（現在　黒石市黒石)、秋田県南秋田郡富津内村（現在　南秋田郡五城目町富津内)、宮城県宮城郡根白石村（現在　仙台市泉区）の談話に使用されている。例えば、津軽に属していて、弘前市にも近い南津軽郡黒石町（現在の黒石市）の談話では次のように「メーヤク　カケル」が使用されている。ここでは感謝の表現としては「アリガドゴシ」が用いられている。

f　コレ　ワーズガダドモ　コレ　オイワイノ　オシルシデシハデ
（これは　わずかですが　これ　お祝いの　おしるしですから）
m　イヤヤ　アリガドゴシ　ハ　ホントニ　ハー　ホントニ
（いや　ありがとうございます　ほんとうに　ほんとうに
メーヤク　カケデネシ
ごめいわくを　かけましてね）
f　ナンモ　ナンモ　ナンモ　マー　マー　イーゴト　シシタネシャ
（いえ　いえ　いえ　まあ　まあ　よかった　ですね）
m　ンニャ　ホントニ　カネジケァ　サヘテ　（f　イガナシ）
（いや　ほんとに　金使いを　させて　（f　どういたしまして）
ソレ　ホントニ　ナントモ　オモヘンジャ
それ　ほんとに　何とも　申訳ございません
m　モーシワケゴヘンジャ　ホントニ
申訳ございません　ほんとうに）

最後のところに「モーシワケゴヘンジャ」が出てきたが、「申し訳ない」関係の表現は祝儀の項では青森県三戸郡五戸町、岩手県九戸郡種市町中野（現在　九戸郡洋野町中野）の談話に見られ、不祝儀の項では岩手県胆沢郡佐倉河村（現在　奥州市水沢区佐倉河）がある。このような状況を見ると、弘前市のメヤグダ（メヤグスル）は東北では特殊なようである。それでは弘前市ではどのような場面で「メヤグ　カケル」が使用されているのであろうか。ここでは犬が人に迷惑をかけることが話題になっている。また、方言話者から「メヤグ　カケル」の例文として提供されたのは次の文である。

・うちの子供は人様に「メヤグ」かけるようなワラシ（子供）ではない。
・明日は大工が作業するからガタガタ「メヤグ」かける。

先の『全国方言資料』に見られたような、お祝いのために相手に負担をかけさせたという、相手を気遣う感謝の用法は認められない。津軽方言では「メヤグ　カケル」によって感謝の意を表すことはないようである。すなわち、感謝において相手を気遣う発想法はないといえよう。いずれの例も、相手に不快感を与える行為を指しているが、謝罪表現ともいいがたい。

この談話には「アリガダメヤグ」が出てきたが、共通語の「有難迷惑」とは用法が異なっている。共通語の「有難迷惑」は「相手が好意的にやってくれている事でも、当人にはかえって迷惑に感じられる様子」（『新明解国語辞典』第７版）である。この場面での「糞をされる」ことがとても有り難いとは考えがたい。話者の報告によると、相手からの不快な行為の場合に「アリガダメヤグ」を用いるそうである。「メヤグ」とは正反対の意味だということであり、そういうこともあって本来は面と向かって言うことばではないとのことである。しかし、この談話では面と向かって言っているので、よほど腹に据えかねたのであろう。

以上、弘前市で録音された「各地方言収集緊急調査」の場面設定の談話資料に現われたメヤグの用例について扱ってきた。用例の分析から見えてきた津軽方言のメヤグの意味用法については、前節（第２節）「津軽方言のメヤグの意味用法」に述べてある。そこに示したことが、ここで扱った用例から帰納されているのか確認してほしい。

## 4　感謝と謝罪の両用法について

感謝と謝罪の両用法を持つ表現としては身近なものにスミマセンがある。スミマセンは、もともとは自分の心が澄まない、気が納まらないという意味であった。自分の行為が相手に迷惑などをかけてしまい、相手に対して自分の心が落ち着かないということから、謝罪の用法が新たに出現してきたのである。感謝表現の発想法が、近世後期以降、相手の行為への気遣いや配慮に

変わってきた。それによって、相手の自分への厚意に対して相手に負担をかけさせているという意識が生じて、謝罪表現が感謝表現としても使用されるようになってきたのである。このような表現としては他にゴメンナサイ（ゴメンネ）やモーシワケナイがある。

津軽方言において、感謝と謝罪の両用法を持っている表現に、メヤグの他にドスベ（どうするべい）とカニ（堪忍）がある。ドスベは、秋田県方言において感謝と謝罪の両用法を持つシカタネ（仕方ない）と同じ発想によるものである。相手からの厚意に対して、どうしたらよいのかわからない。またどうする方法もないという困惑を表すものである。また謝罪の場合も、自分の行為が相手に不快な気分を与えてしまったことに対して、どうしたらよいのか、またどうする方法もないという、これまた困惑の表明によるものである。感謝表現の発想法は、田島優（2009・2014）などで示したように、困惑→評価→気づかい・配慮→謝罪のように変化してきた。ドスベ並びにシカタネはこの困惑に該当するものである。

カニ（堪忍）については、方言話者から「色々してもらってほんとにカニ」のような例を教えてもらった。スミマセンと同じく謝罪表現が感謝表現にも転用されたものと考えられるが、そうすると発想法の歴史の観点からは新しい表現のように感じられる。カニの用例にまだ出会っていないし、方言集においても確認できていないので、ここでは扱わないことにする。

ところで、メヤグの発想法はどうなのであろうか。此島（1968）は、先に述べたように、感謝と謝罪の用法ともに困惑に基づくものとする。確かに、津軽にはドスベがあり、また近隣の秋田県にはシカタネがある。メヤグが感謝と謝罪の両用法を持っていること。また、次節（第５節）で述べるように、「迷惑」のもともとの意味用法からすると、両用法を持つメヤグが出現してきた背景としては困惑に基づくものと考えた方が適しているように思われる。

## 5　「迷惑」の語史と津軽方言のメヤグ

「迷惑」は漢籍に見られる語である。日本語では、室町時代頃から使用が多く見られ、抄物やキリシタン文献、狂言などにその用例を拾うことができる。『日葡辞書』（1603、04）には次のような意味記述がなされている。

Meiuacu. メイワク（迷惑）苦悩、あるいは、心を痛めること。例、Meiuacu xenban nari.（迷惑千万なり）この上ない悩みと苦しみとを感ずる。

Meiuacuna. メイワクナ（迷惑な）心を痛ませるような（こと）、または、苦悩を引き起こすような（こと）。

『邦訳日葡辞書』（1980　岩波書店）による

『日葡辞書』のメイワクの意味記述から困惑の意味をとることができる。メイワクナについては、メイワクの用例から自己に関するものと考えられる。堀口（1996）は、「迷惑」の名詞・動詞の意味用法として次の6つを挙げている。

(1) 道に迷うこと。また、道に迷ってあらぬ所に入り込むこと。
(2) 心が迷い乱れること。衝撃を受けて我を失うこと。動顛。
(3) どうすべきかわからず、とまどうこと。当惑。困惑。
(4) ひどい目に逢って苦しむこと。難儀。
(5) 不都合な目に会って、不快に思うこと。
(6) 相手に不都合をもたらして、申しわけなく思うこと。

ただし（1）は漢籍の用法であり、日本語としては一般化しなかった。また、（6）の用法は文献では「迷惑つかまつる」「迷惑いたす」の形で用いら

れている。すなわち、謙譲語を伴って使用されていた。現在は「迷惑をかける」などの形を用いるが、「迷惑をする」という言い方が残っている地方もあるという。津軽方言はその地方の一つといえよう。つまり、それらの地方は謙譲語を用いずに単に「する」だけで使用しているのであり、それらの地域での「する」は共通語に見られるような自動詞的ではなく他に影響を及ぼす他動詞性のものといえよう。

「迷惑」の形容動詞[注9]としての意味用法は、先の（1）～（6）の意味用法のうち、室町期に使用例が認められるのは（3）～（5）に対応するものである。その中で、（3）ないし（4）に対応するものと、（5）に対応するものとの二つの用法がもっぱら認められる。そして、（6）に対応する用法は江戸時代になってからであり、それもそれほど多くはなかったようである。津軽方言のメヤグダはこの（6）に該当するものである。

このように見てくると、メヤグに感謝と謝罪との用法があることは、「迷惑」の意味用法としては特殊なものといえよう。そして、「迷惑」がマイナス的な意味という点からいえば、感謝の用法は謝罪の用法よりさらに特殊だといえる。ただし、狂言資料[注10]を見ていると、上からの行為に対して「迷惑」を用いて恐縮の体を表している場合がある。

（昆布売）さあらはまいらふ
（大　名）かうゆかしめ<先になって行きなさい>
（昆布売）是はめいわくでござる、たゞござれ<先にお行きください>
（中略）
（大　名）はじめたる人申（ママ）はいかゞなが、ちとそなたにむしんをいひたひが、きひておくりやらふか
（昆布売）某ににあふたる事でござらは、やすひ事でござる
（大　名）まつお礼申
（昆布売）それはめいわくでござる

（大蔵虎明本狂言集「昆布売」）

「迷惑」に感謝の用法が出現したのは、この語に困惑の意味があったことによろう。ただし、津軽方言の話者においてはメヤグに対して困惑の意味は意識されていないようである。もともとの発想法が忘れられたのであろう。一方、謝罪の用法の場合は、先に挙げた（6）に該当するものである。ただし、その意味用法を謝罪表現として使用している点で津軽方言は特殊だといえよう。

次に品詞の面についていえば、津軽のメヤグスル（シタ）の意味に近いのは、共通語では「迷惑をかける」である。この意味用法の場合、室町時代の文献では「迷惑つかまつる」「迷惑いたす」のように、「つかまつる」や「いたす」といった謙譲表現を用いた形式が取られていた。また形容動詞のメヤグダの場合も、先に述べたように文献においては相手に不都合をもたらし申し訳ないという意味での使用は少なく、これは特殊なものであった。

共通語の「迷惑」も困惑の意から大きく変化したように、津軽方言のメヤグの謝罪の用法も、共通語ほどではないが、もともとの困惑という発想法から変わってきているのである。

## 6　若年層の「メヤグ」について

メヤグは、学生のレポートなどを参照すると、若年層においても使用されている。ただし、若年層の場合は、感謝の「メヤグ」に対して相手への負担を意識しているようである[注11]。次の文章は前任校である宮城学院女子大学の学生による報告に基づいている。

（1）A「この菓子っとば、おめさ　やるはんで　頑張りへ」
　　B「わい〜、めやぐだじゃ」
　　A「なもなも」

Aがお菓子をくれたことに対してBは「わい〜、めやぐだじゃ」と

お礼を述べている。これは「あら〜、悪いね」というような意味であり、相手に申し訳なさとお礼を同時に伝える表現である。「めやぐ」というのは以前に一度授業で取り扱ったことがある。その時は、津軽地方では感謝の言葉として「迷惑だ」というように紹介された。語源としては「迷惑」であるのだが、発音するときは「めいわく」=「めーわく」=「めやぐ」となっている。「めいわくだ」と発音する人はほとんどいないため、津軽の人でも語源が「迷惑」にあるということを知らない人が多いと思う。私も「めやぐ」は「めやぐ」としか思っていなかったため、授業で聞いた際は驚いたし納得した。実際は単純に感謝というよりも「(こんなことをしてくださるなんて) 申し訳ないですよ。悪いですよ」という謙遜の意味合いが強い。続くBの言葉も「なもなも」=「何も何も」=「何も (ありませんよ)」=「なんてことないですよ」という謙遜の言葉になっている。

(2015年度　日本語史レポート)

(2) コッタニ　モラッテ　メワクジャ (こんなに　もらって　悪いわ)
　　オ　オ　メワグ　メワグ (お　お　ありがとう　ありがとう)

(2010年度　卒業論文)

若年層においては、メヤグに対して「悪いね」「申し訳ない」というイメージを持っている。これは、現代の感謝の発想法が相手への気遣いや謝罪に基づいており、そのことが影響を与えているのである。現在使用している語や表現が、このような現代の発想法によって再解釈されていると思われる例が全国において見られる。例えば、仙台市近辺では感謝表現としてオショーシが使用されている。この表現は米沢地方でも用いられている。ショーシは東北地方の広い地域で恥ずかしいという意味である (ただし津軽方言では恥ずかしいはメグサイ)。すなわち、オショーシは困惑の発想に基づいた感謝

表現である。このオショーシに対しても気遣いの意識が現れている。土井八枝氏の『仙台方言集』（1919）には「お気の毒」が共通語訳として用いられている[注12]。

お・しょ・しい（形）恥ずかしい（笑止）
お・しょ・しがり（名）恥かしがる人、はにかむ人
お・しょ・しさんでございます（句）お気の毒でございます。痛み入ります
「これはつまらぬ物ですがさし上げます」
「まづ〳〵おしよしさんでございますこと」（p12～13）

また、中国地方の西部で使用されているタエガタイ・タエガターも困惑の発想に基づく表現であるが、これも気遣いで解釈されている。森川信夫氏の『面白くて為になる山口弁よもやま話（増補版）』（2002）では、「申し訳ありません」と訳されている。また、山口弁において「気恥ずかしい」の意味での使用が少なくなってきていることも記されている。

相手の厚意に対し済まなく思う、申し訳ない、恐縮である、ありがたいという気持ちを表現するとき、伝統的な山口弁では「たぇーがたぇー（堪え難い）」という形容詞を使います。「こねーなことまでせてもろーて、たぇーがとーあります（こんなことまでしてもらって、申し訳ありません」などと言うのです。（中略）
山口県ではほかに、気恥ずかしいという気持ちを表す場合にも「たぇーがたぇー（堪え難い）」を使っていましたが、最近では、そういう意味で用いる人は非常に少なくなってきています。（p5）

岡野信子（1990）によると、下関市ではオーキニが分布していたところに

タエガターの勢力が入ってきたという。困惑の発想によって出現したタエガターが現代の感謝の発想法に基づいた気遣いによって再解釈され、新表現として勢力を広げてきたのであろう。自己の困惑を表す表現は他者への気遣いへと変化しやすいという特徴がある。「気の毒」自体がそのような変化を起こしている。各地に見られる困惑の発想に基づいて出現したと思われる語や表現には、このような気遣いへの再解釈が行われている可能性がある。この現代における感謝に対する意識はすべての感謝表現に影響が及んでいると思われる。

津軽方言に話を戻すと、学生のレポートによれば、若年層ではメヤグと「迷惑」とは結びついていないようである。メヤグは若年層においては感謝表現としての意識が強いようであり、一方「迷惑」についてはメヤグではなく共通語的なメーワクなのかもしれない。

## 7　感嘆詞による感謝

津軽方言において、感謝表現としては、メヤグの他に先に挙げた感謝と謝罪の両用法を持つドスベやカニがあるが、さらにワイハ（ワエハ）という表現がある。ワイハは驚きを表す感嘆詞であり、松木明（1982）には次のように説明されている。

わえは（感）あらまあ。

弘前の女性特有の感歎詞。感歎、感動、驚愕などの場合に言う。これにドウスベェ（どうしましょう）を続けて、ワエハ　ドウスベェとも言う。（中略）

○ソロホド オミヤゲモラテ　ワエハ　ドウスベェ。ゴメェワグシテシマエサネ。（そんなにたくさんお土産をいただいて、あらまあどうしましょう。御迷惑かけてしまいますよ。）p491

ワイハが感謝表現のドスベと一緒に用いられることが多いことから、ワイハがドスベの感謝の意を担ったのである。オーキニがアリガトー（ゴザイマス）などの感謝表現と一緒に用いられることが多くなったことから、オーキニ自体に感謝の意が帯びたのと同じことである。

東北地方で感嘆詞の使用が多いことは、小林隆・澤村美幸（2014）などで扱われている。ドーモを感嘆詞として扱ってよいかわからないが、感謝表現としてドーモ（ドーモドーモ）の使用は東北に多い。

また、感謝表現として驚きの表現が使用されることがある。コレワコレワは有名であるし、佐渡にはナンノコッタロやドーナルヤカという表現がある。高知県のタマルカは、もともとは困惑の意であったが、これが感嘆詞として使用されている。相手の厚意に対して、驚きによって感謝の意を表明するのも、感謝表現の一つの方法なのである。

## おわりに

津軽方言においてメヤグ（迷惑）が感謝表現として使用されていることに興味を持ち続けていた。2021年に弘前市の「各地方言収集緊急調査」の資料をたまたま目にすることができ、新型コロナウィルスが多少収まった11月初旬に弘前市で確認調査を実施することができた。その調査結果や、津軽方言における他の感謝表現について述べてきた。

本稿の調査結果は、津軽に縁のない筆者が文字化された資料をもとにして、地元の方にわずかな時間で尋ねて、そこから検討して得た結論である。したがって、十分に分析できていない点も多く、また誤っている点もあると思う。ぜひ、津軽方言の研究者や、津軽に居住している方によって、メヤグの意味用法について解明してほしいと思っている。本稿はそのための入口になればと考えている。

## 注

1　岩崎真利子（2014）「若者と方言　―八戸工業大学におけるアンケート―」は、地元の方言や東北方言について、使用語、理解語、知らない語という意識アンケートを行ったものである。調査対象とした方言は佐藤亮一編『都道府県別　全国方言辞典』（2009　三省堂）によっている。そこにあがっている青森県方言について、学生の出身地（青森県の南部地域、津軽地域、下北地域、秋田県、北海道、山形県、宮城県、福島県、関東圏）に分けて分析を行っている。メヤグも「めやぐだ（感謝の言葉。ありがとう）」として調査項目に入っている。なお、『都道府県別全国方言辞典』の青森県の項には、次のように記載されている。

めやぐだ……感謝の言葉。ありがとう。

例文　こした良いおみやげ貰って、めやぐだじゃ（＝こんな良いおみやげを貰って、申し訳ない<ありがとう>）

そこには、他の項目に見られるような［津軽］［南部］のような地域限定の表示は記されていない。また、青森県のあいさつ表現については、弘前のことばが挙げられ、「感謝＝めやぐした」が示されている。

この調査の分析結果として、津軽では理解語（その方言の意味は分かる／聞いたことがある。祖父母や年配の方が使うのは理解できるが、自分では使わない）での回答が多い（19名中11名）。南部や下北では知らない語（その方言を全く知らないし、使わない）の回答の割合が高いという結果になっている。このことから、感謝表現のメヤグは津軽方言と考えられる。宮城学院女子大学で教えた弘前市出身の学生（後述）によると現在でも使用するとのことであるから、津軽でも弘前市周辺に限定されるのかもしれない。

2　文字化資料を見ていくと、１年目の資料あるいは１年目と２年目の資料しかない県も多くある。しかし、そのような県においても教育委員会から報告書が刊行されている場合があるので、文化庁から国立国語研究所へ資料を移管する際に行方がわからなくなったとも考えられる。

3　青森県の他の地域では共通語的な「メーワクカケタ」の用例しか見られない。

4　2021年11月1日に、弘前市大清水において、70歳代の男性女性各1名の協力によって、文字化資料をもとに、それぞれの用例が感謝か謝罪かの判定や、またその使用意識についての確認を行った。

5　その出典については松木明著『弘前語彙』（1982　弘前語彙刊行会）とある。メヤグは松木氏の『弘前語彙』では次のように記載されており、最後にメヤグの感謝の用例が上がっている。

めエやぐ（名）迷惑。

メイワクの転訛。ワがヤになったもの。ワのw音が脱落し、a音が前のi音に引かれてy音となったものであろう。迷惑をかけること、気の毒な目に合わせること、申しわけないことをする（相手に対して）、痛み入る（自分に対して）などの意である。

○メェヤグダケンドモ　ワエサ　ミツコエッペェ　ノマヘデケヘンガ。（迷惑でしょうが私に水を1杯飲ませてくれませんか。）○ナンボ　オメェサ　メェヤグカゲルガシラ。（なんとあなたに気の毒な目にあわせるのかしら。）○コノホドノッタド　オミヤゲモラテ　メェヤグヘシジャ。（こんなにたくさんのおみやげを戴いて、なんとも痛み入ります。）p458

6　第一巻（1957）の凡例によれば、「本文の中では、アクセントは次のように太字（コジック）をもって示すことにする。」とある。

7　佐々木隆次（1988）によると、青森市では終助詞の意味用法は下記のようになっている。本稿で扱っている弘前市と同じなのか確認の必要があろうが、佐々木氏によれば、「青森市方言も津軽方言の一部をなすが、津軽の他地方言と大差ない」とあるので、これを参考にして論を進めていく。

ジャは、自分の判断したことを軽く断言する時に発する語とされている。ネシ・ノ・ナは、相手に詠嘆的に念を押したり、同意を期待して発する語である。その中では、ネシが丁寧度が一番高いようである。ナは下待遇である。祝儀の場面は、本家の息子が結婚するので、新家・分家の人がお祝いを持ってくるという設定になっている。

8　これは、共通語の「迷惑する（迷惑だ）」が自分が相手からの不快な行為を受けた場合に限定されるようになったために、自分の行為が相手に不快感を与えた場合には「かける」という動詞が必要になってきたのである。

9　堀口和吉（1996）では本稿での形容動詞は形容詞の扱いである。

10　大塚光信（1996）には、抄物における「迷惑」の様々な意味用法が例を挙げて説明されている。大蔵虎明本狂言集の引用は、大塚光信編『大蔵虎明能狂言集　翻刻註解　上・下巻』（2006　清文堂出版）によった。ただし、一部表記を改め、訳を加えた。

11　注1で扱った『都道府県別　全国方言辞典』の「めやぐだ」の例文の共通語訳では「申し訳ない<ありがとう>」となっている。この項を執筆した佐藤和之氏・坂本幸博氏の意識では、そこに気遣いがあると判断しているようである。

12　同じく土井八枝氏によって、昭和13年（1938）に春陽堂から刊行された『仙台の方言』では次のようになっていて、「お気の毒でございます」が消えている。

おしょしさんでござります　句　痛み入ります、恐れ入ります等の挨拶。
「ます何でがすべ、又頂くのござりますか。ます〳〵 おしょっさんでござります」（まあ何でせう又頂戴物をするのですか。おそれ入りますこと）p41

## 参考文献


岩崎真利子（2014）「若者と方言　―八戸工業大学におけるアンケート」『八戸工業大学紀要』33

大塚光信（1996）『抄物きりしたん資料私注』清文堂出版

大塚光信編（2006）『大蔵虎明能狂言集　翻刻註解　上・下巻』清文堂出版

岡野信子（1990）「下関市域の方言状況　一九八九年調査の報告」『日本文学研究』26　梅光学院大学

此島正年（1968）『青森県の方言　新版』津軽書房

小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言い方　西東』岩波新書

佐々木隆次（1988）「青森市方言文末詞の考察」『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』桜楓社

佐藤亮一編（2009）『都道府県別　全国方言辞典』三省堂

田島優（2009）「感謝表現から見た発想法の変化」『台大日本語研究』17期　台湾大学

田島優（2014）「感謝のあいさつ表現」『柳田方言学の現代的意義』ひつじ書房

土井八枝（1919）『仙台方言集』

土井八枝（1938）『仙台の方言』春陽堂

鳴海助一（1957）『津軽のことば』第1巻　津軽のことば刊行会

鳴海助一（1961）『津軽のことば』第10巻　津軽のことば刊行会

日本放送協会編（1966～67）『全国方言資料』日本放送出版会

広戸惇・矢富熊一郎編（1963）『島根県方言辞典』島根県方言研究会

堀口和吉（1996）「「迷惑」考」『山邊道』40　天理大学国文学研究室

松木明（1982）『弘前語彙』弘前語彙刊行会

森川信夫（2002）『面白くて為になる山口弁よもやま話（増補版）』


調査にご協力下さった皆様にお礼を申し上げます。また、その方々をご紹介下さいました弘前学院大学の今村かほる先生には大変お世話になりました。感謝申し上げます。

本研究は、国立国語研究所の共用利用型研究「感謝表現研究における「各地方言収集緊急調査」資料の活用」と、JPSP 科研費基盤研究（C）「発想法による挨拶表現の歴史的変遷と地理的分布の総合的研究」（課題番号 JP16 K 02740）による成果である。

（たじま・まさる　法学部専任教授）